

が栄養失調や環境不備のため病氣にかかり死じするという痛ましきであった。

空腹に対する人間の執念は恐ろしいものだった。あの時兵隊が屍衛兵に立ったことがあった。その兵隊は空腹に耐えかねて死者の目玉を食べたこともあった。ともかく私達がいかに寒さと飢えに耐えてきたか、読者の皆様には想像もつかないことだろう。

亡くなられた同僚のご冥福を心からお祈りし、筆を止める。

タタールの丘、ヴォルガの流れ

石川県 荒川 宏

ここ数年来、戦争にまつわる話を聞きたいという人が増えてきたように思う。

帰国後十年ほどの間は、時々夢にうなされることさえあった抑留の暗い残像など、家でも語ったことがない。五十年を経た今日では、全く茫漠として忘却の

なたに押し流されていきつつある。ほんの追憶に残る断片の中から、その二、三を話そう。

虜囚の悲哀

昭和二十年十二月半ば、ポーランドのカチンの森の連想（将校の大量虐殺）に脅え、ソ軍のコンボーイ（護衛兵）の強奪に遭いながら、辿り着いた森の中の半洞窟の収容所ラーダ。着いた夜すぐにバーニャ（入浴場）に引率された。身に着けている物全部を針金の輪に通して、熱気消毒の準備をする。

瞬時に冷え込んだ裸の一群に、漸く順番がきて一列に並んで控室に飛び込む。ハンガリー人らしい勤務者が、片手にバリカンを持って次々と陰毛と腋毛を刈る。ソ連のシストラ（看護婦）がジツと監視している。

「捕虜になってしまったなあー」と、言いしれぬ悲哀の実感が胸にこたえた。

タタールの丘を越えて

ダモイ（帰国）か、との期待は見事に外れて、森の収容所から東行した列車はキズネルの駅にとまってしまった。エラブカまでの七十五キロを昭和二十一年七

月二十二日から三泊四日で行進させられた当時のメモ。

「延々と続く長い隊列が、羊の群れの如く野を越え丘を越えて、蹠踵として辿る。朝から何も口にしない身体に、灼けつくような夏の陽が容赦なく照りつけていた。

子どもを吹いて溜まり水を掬って飲む。ダダーンとコンボーイが放つ銃声が追い立てる。この飢えにも耐えよう、この渴きにも耐えよう。しかし、いかにしても堪え難いのは、この群れに注がれる韃靼人（タタール人）たちの憐憫の眼差しであった。」

輿論会議

第九七收容所Bラーゲル。將校約五千人。

收容所の管理は初め旧階級が重んぜられた。ソ側のこれに対する方策は、まず「肩章を外せ」。次いで高級將校によるラーゲル行政に対する民主的参加として、「民主議會」の結成をそそのかしてきた。ファシズムしか知らない思想的後進国日本の將校に、民主主義の手法を教えてやるといった感があった。その主旨はごもっとも、首席も同意、一般も賛成した。

そこで「輿論會議（ソビエート）」が提唱され、各大隊から一人、中隊から一人ずつ、無記名投票で選挙された代議員約三十人で構成された。

第一回の會議は二十二年二月十一日に招集された。私も選ばれて、出席した顔触れを見ると、何と大部分が保守反動と目された輩、即ち我が党の士であった。

選挙規定、會議の構成、運営に関する規定が可決され、毎月一回の招集、幹事会、分科会その他が設置された。従来の首席の管理系統からの独立性も明確になった。

ところが問題があった。議長、副議長及び書記長は選挙と関係なくソ側の任命であった。

仰せに従わざるを得なかったが、ここに彼等の隠された「意図」があった。結局は対ソ協力即ち労働強化の方向への命令遵守であった。「無事に帰国して祖国復興を」が我々の共通認識となってきたのも当然で、代議員の一部で密かに協議が重ねられた。

第四回會議の席上、緊急動議として神亮一中尉が発言した。「我々はソ連当局の指導を頂いたお蔭で、初

めて民主主義を理解できるようになりました。ところでいつまでも議長らの任命があるというのは納得できません。これも選挙で選ぶ方が民主的であり、もうその時期ではないかと思いますが……」

当惑した議長尾加軍医中佐は暫時休憩を宣して、陪席のクロイツル女史（政治将校）と別室に移って相談した。論戦の二番手は横尾中尉、三番手桜井中尉……と準備していたが、意外にも一発でこの提案は受け入れられた。あまりにも簡単に受け入れられて、気分っていた我々は拍子抜けの感じさえした。

後日の臨時会議で、議長に來間法務少佐、副議長に志村少尉、書記長に私が決まった。会議は、会を重ねる毎に成果を挙げた。ラーゲル生活は次第に秩序立って、明朗になっていった。日常の重大関心事である労働と給与の分科会も活動した。対ソ交渉には、十分調査した計数的資料に基づき、数字に弱い彼等を説得することに成功した。八時間労働と週一回の休日も獲得した。

七月に入って私は栄養失調に陥り、パン切り工場に

転属させられ、書記長役も代議員も退任した。ソ連当局の内偵書に要注意者とされていたので、終戦まで軍司令部にいて情報勤務に就いていた私が、追及されて戦犯となるのを憂慮された白川豊首席（大佐）が特別措置をして下さったのであった。深夜首席室で、諄々と自重を促された時の温容は、終生忘れることができない。

八月になって帰還促進の提案が会議に上程された。所内全員の署名を得て、スターリン首相宛の帰還請願書をタタール共和国内務大臣の手を経て提出する運びになった。しかし、スターリン首相に対して非礼であると直ちに拒否されてしまった。更に、このところ増大する労働強化を不当として強く反対した。

ここにおいて輿論会議は遂に解散を命ぜられたのであった。來間少佐以下先輩たちは、いずれも二、三年から十年近くも帰国が遅れた。幸いにほとんどの方が老齡ながら現在も意気軒高であるのが何よりも嬉しい。ウラルを越え、遠くヴォルガの流れが、今は恩讐を超えて過ぎ去った長い時の移りの遙けさに、茫々たる

記憶の中の、白い一筋の一点景として残るのみである。

なお、終生忘れ得ぬ一事を加えるなら、終戦時、延吉の第三軍司令部参謀部にあつて情報に勤務していた私が、八月十八日、池谷参謀長に同行して、汪清におけるソ軍二五軍司令官チュシチャコフ大将との停戦協定に同席した時のことである。

モスクワの日本大使館付武官もされてロシア語の堪能な池谷参謀長の対話の始終は、全くチンプンカンプンで理解出来なかつたが、末席にあつて唯々汗を流す緊張の一刻であつた。

私は昭和二十二年十一月函館に帰還復員したが、池谷参謀長が三十一年、お元気で舞鶴に帰還されたのは無上の喜びであつた。

黒パン生活を偲んで

石川県 藤澤 栄次

昭和十八年九月、戦局激化に伴う繰り上げ卒業によ

り学窓を巣立った。既に就職が決定していた日本銀行管理局に十月の一月間のみ勤務し、十一月一日、現役兵として福井県鯖江の中部第八〇部隊（歩兵第三十六連隊）に入隊した。二十日間の基礎教育の後渡満し、東安省密山に駐屯の満州第三一〇八部隊（満州独立第十五迫撃砲大隊）に転じた。

第一期の初年兵教育終了後に幹部候補生を志願し、数次の選抜試験を経て念願の経理部甲種幹部候補生として、新京陸軍経理学校（満州第八一五部隊・第八期生）へ入校した。

短期間ではあつたが猛烈を極めた教育に耐えて、昭和十九年十一月末卒業し、晴れて経理部見習士官となり、再び満州東北地方国境地の部隊に赴任し、北辺の警備に若き日の情熱を傾注していた。

運命の日、昭和二十年八月九日は、林口の満州第三百三十五師団挺身大隊の主計として勤務していた時に迎えたのである。

ソ連軍の突然の進攻に対し、部隊は直ちに牡丹江東方の愛河に転じて迎撃態勢に入った。間もなく十二日